

(熊本郡南種子町平山広田)

位置と環境

遺跡は、種子島の南部、東海岸に面し南北に長く形成された砂丘に所在する。遺跡の海拔は約6mで砂丘の北寄りを広田川が東流し砂丘をつき切って海に注いでいる。地形は、海岸に面する前縁が最も高く、背後は緩傾斜をなして水田地帯・畑地に接し、さらに後方には現在の広田の集落がある。

調査の経緯

本遺跡は、昭和30年(1955)夏に来襲した台風22号により砂丘前縁が崩壊し、崖面に人骨片・貝製品・土器片が散乱しているのが発見されたことが契機となり、調査を行うことになった。

発掘調査は、昭和32年(1957)から昭和34年(1959)の3年次にわたった。

遺跡の基本的な層序は、上から表土・砂層・褐色粘質砂層・粘質赤褐色土層・基盤の砂岩層(茎永層)で、砂層は厚さ2.5~4.0mを測り、間に黒色砂層を挟んでいる。黒色砂層は砂丘全域に認められ、北側では北隅の東側崩壊面の調査(1.0×4.5m)で焼土(炉跡)や貝層が、広田川に面した崩壊面の整理(10m)では貝層が確認された。南側では埋葬遺構が認められ、墓域は南北10m東西約10m(東側へ広がる)の広さに認められた。

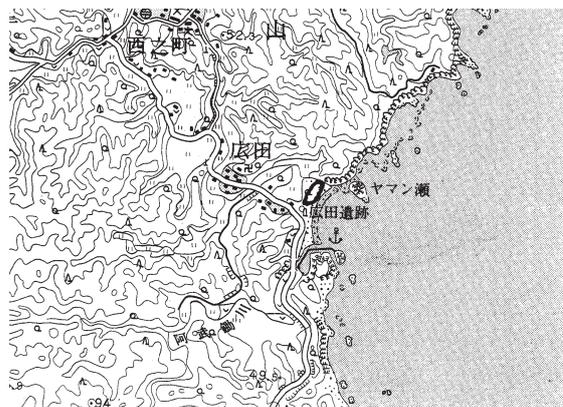
遺構と遺物

埋葬遺構(埋葬習俗と再葬)

1 下層の埋葬

下層の埋葬は、一次埋葬で単層のみである。屈肢葬が一般的であるが、女性には極端な屈葬が多い。人骨の周囲や上面には珊瑚壊や海浜礫を配する例が多く、積石をともなったものもある。

下層人骨の多くは豊富な貝製装身具を装着している。頭部に長方形や円形の有孔盤状品を一つにつないだヘアバンドをめぐらす女性、頸部から胸部にかけて1000~5000個の貝製白玉や小玉の連珠をまとう男女、竜佩形の貝製品を組み合わせ手首や頸部にめぐらす男女、彫画のある貝符を頸や腕に装着する女性、大型巻貝の腕輪を装着する男女、小型の貝製



第1図 広田遺跡の位置

小玉を一重や二重につないでネックレスをする女性、ノシガイ・ヒメツノガイ・ニシキツノガイなど組み合わせ手首や頸部、腰部にめぐらす女性の例が認められた。そのほか、ガラス製小玉や管玉を装着する例もみられた。

これらの装身具は男性に比べて女性の場合が数多く豪華である。ただ一例だけであったが女性なみの装身具をまとう男性の例があった。

写真1 下層の女性人骨の出土状況
貝符・竜佩・ノシガイ・ツノガイ・貝小玉を装着

2 中層の埋葬

中層では二群の再葬例が確認された。一つは四肢骨を並べてその上に頭蓋骨を置くもの、ほかは2体の合葬例である。

伴出する貝製装身具には、いくらかの変容が認められるが基本的には下層と同じである。

人骨の検出、数は少数であるが、中層における再葬の出現は重要である。

3 上層の埋葬

上層では、焼骨をともなう二次埋葬が認められ、第一次調査ではこの状況が顕著に認められた。東西方向に細長く自然礫や珊瑚塊を配置した長さ約7m幅1.4mに及ぶ石囲内に、2体以上の再葬合葬骨が7群に分けられて並び、各群の人骨下には20~30cmの厚さの焼骨層が認められ、その中に貝製装身具も混在していた。再葬に際し、四肢骨や頭骨を除いた小型の骨や装身具を一括して焼き、これらを石囲内に納め、この上に大型の再葬骨を配したものと考えられる。残存している貝製品には、下・中層の人骨で認められた貝符に対し、上層にのみともなう貝符がある。貝符上には陰刻された独自の文様が施されている。これらは石囲内に一群につき6~42枚をとめない、四肢骨に並べて置かれたものもある。また石囲外にも認められる。これらのことから、明らかに送葬の最終段階で意識的に副葬されたものである。このように上層では、埋葬習俗・装身習俗が下・中層に比べて大きく変容していることがうかがえる。



写真2 上層人骨（4群）の出土状況
四肢骨上や周辺に貝符（上層タイプ）が散在

遺物

1 独自の貝文化（第2図~第5図）

(1) 貝符の使用（第2図1~12）

出土する貝符には、下・中層の装身具、上層の副葬品（明器）とあきらかな機能差がある。

装身具としての貝符は、その四隅あるいは二隅に着装のための紐孔を穿っている。

下層人骨に着装の貝符は、四隅の出っ張りのある長方形で下層に限られることから下層タイプ（1~6）、中層の貝符は、下層の貝符を長辺あるいは短辺で二分割したような形状をしていて中層人骨に

ともなうもので中層タイプ（7~12）に分けられる。両タイプの貝符とも表面に古代中国の饕餮文・蟠螭文系の半肉彫の带状文様が施文されているが、下層から中層にかけ、全体形状と文様において簡略化の方向に変容している。

これらの貝符は、大型イモガイの螺殻を用いて板状に作られている。

上層の貝符（第3図1~20）は、着装のための紐孔もなく、集骨再葬のときに副葬されたもので、多



第2図 貝符

（下層タイプ1~6、中層タイプ7~12、竜佩13~15）

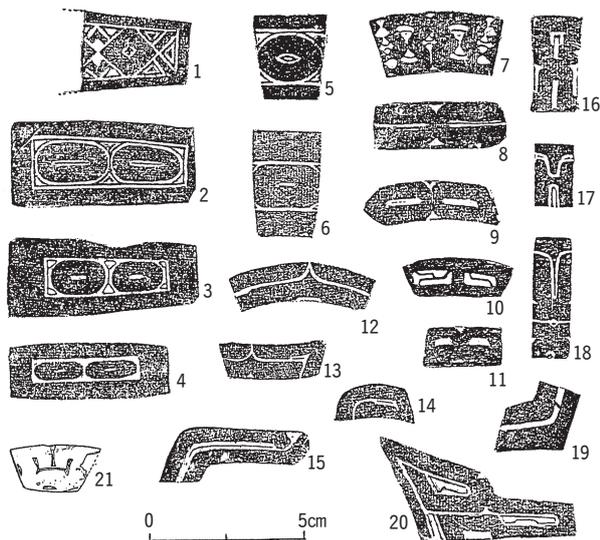
種多様なものがみられる。これらは形態と文様によって二系統に分けられる。一つは下・中層タイプに系譜をもつもので著しく便化されたもの（20）と、ほかは上層タイプで独自の文様をもつもの（1~19）で、定形的なもの不定形的なものに分けられる。

上層の集骨層には、上層タイプの貝符とともに検出された「山」字文具貝符（21）がある。扇形をなし横（最長）4.1cm縦2.1cmで、中央部に陰刻・薬研彫で俗に隸書といわれている書法で彫っている。

多数の貝符の中で、一例だけ「山」字文具貝符が彫り方・形とも異なっている。

(2) 竜佩形垂飾品（第2図13~15）

下層人骨にともなう独特の形態をもつ小型の垂飾



第3図 上層タイプの貝符 (1~20)
「山」字文貝符 (21)

品で、大型イモガイの螺塔部を研磨して作られている。表面に列点を刻んだもの (13) もあり、竜の鱗を連想させる。

(3) 貝製腕輪 (第4図1~5)

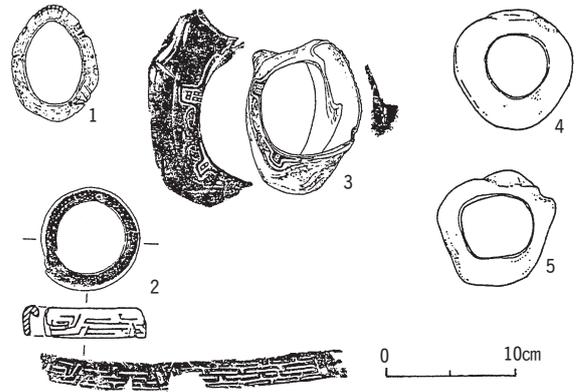
下層から上層にかけて用いられた装身具である。これらはオオツタノハ・ゴホウラを用いて製作されたものが最も多く、次いでオニシ・イモガイが用いられているが少数である。オニシ以外は奄美、沖縄諸島近海に棲息する大型巻貝である。

下層では、オオツタノハ製貝輪 (1) がよく用いられ、しばしばオニシ製貝輪をともなっている。また彫画のあるイモガイ製貝輪 (2) やゴホウラ製貝輪を加えて装着している例がある。男女を問わず装着され、片腕あるいは両腕に装着しているが、27個装着した例がある。

中層タイプの貝符をともなう人骨には、ゴホウラ製貝輪の使用例が多く、オオツタノハ製貝輪やオニシ製貝輪も混在する例がある。オニシ製貝輪には下層貝符に類似の文様を表面に施すもの (3) がある。中層のゴホウラ製貝輪 (4) は腕輪の帯幅が従来のものより広がっている。

上層では、ゴホウラ製貝輪 (5) が主体をなし、オオツタノハ製貝輪がこれに混在する。ゴホウラ製貝輪の内孔形は隅丸方形に近づき、全体形状はゴホウラの突起をとり囲んだ独特な形状となる。

貝製腕輪は、下層から上層にわたってその中心的



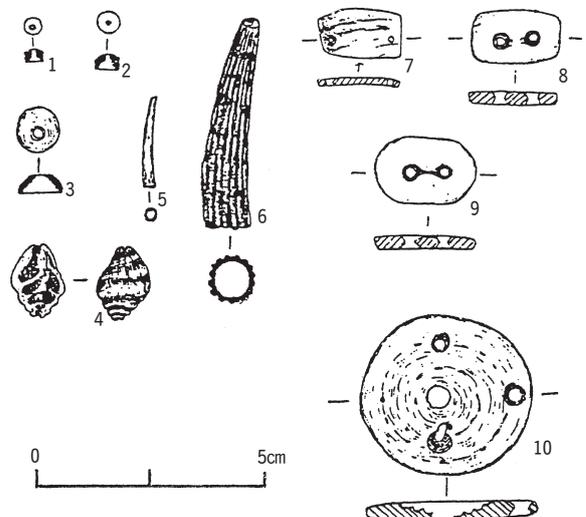
第4図 貝製腕輪

1. オオツタノハ製貝輪 2. イモガイ製貝輪
3. オニシ製貝輪 4~5. ゴホウラ製貝輪

な素材をオオツタノハからゴホウラへと変化させ、形態を楕円形から突起付隅丸方形へと変化させている。

(4) そのほかの貝製垂飾品 (第5図1~10)

イモガイの幼具の螺塔部を研磨して作られた貝小玉 (1~2) はネックレスにしたり、一体に数千ものイモガイやそのほかの小型巻貝 (3) を利用している。ノシガイを縦に半截研磨したもの (4) は、ツノガイ (5~6) と併用して垂飾品としている。貝を方形盤状に作り2個の孔を有するもの (7~9) は数個をつないでヘアバンドにしている。大型イモガイの螺塔部を研磨して2~5個の孔を有するもの



第5図 貝製垂飾品

- 貝小玉 (1~3) ノシガイ (4) ツノガイ (5~6)
方形盤状垂飾品 (7~9) 円形盤状垂飾品 (10)

(10) は小児の首飾りとして利用した例がある。

2 貝製品以外の垂飾品

下層人骨にともなって数は少ないが、ガラス製小玉・管玉や碧玉の管玉が出土している。

3 土器・滑石製石鍋 (第6図)

埋葬跡A 1区出土の1～7は全て壺で弥生時代前期から中期初頭にいたるもので、1は板付I～II式 2は板付I式 3は板付II式 4・5は板付II式で、これらは北九州系のもの、6・7は周防灘・響灘系のもので弥生時代後期末から中期初頭にいたるものである。8～17は埋葬跡全域から出土する甕で在地土器としての特徴をもち、弥生時代後期末から古墳時代前期にいたるものと考えられる。19～21は奈良地方に出土の古墳時代の布留式に該当する。18の土師器は平安時代のものである。なお、埋葬跡からは平安末～鎌倉時代の滑石製石鍋が出土している。

23・24は生活跡に出土の南九州弥生時代中期の入来式である。

特徴

広田遺跡は、在地の土器文化に加えて、北九州や

周防灘・響灘に出土の弥生時代前期～中期初頭の土器や奈良地方に出土の古墳時代の布留式など外部からの移入品がある。

埋葬には焼骨をともなう集骨再葬の習俗がみられる。下層人骨には屈肢葬が多く、成人骨が多い。

埋葬人骨には、南海産の大型貝類から作られた豊富な装身具を利用している。貝符の使用について、下・中層では装身具として、上層では送葬の時に副葬したもので明らかに区別されている。「山」字文貝符と下層人骨の装身具である竜佩は広田だけの出土である。

貝符にみられる彫画の文様は、中国古代との関連を示している。

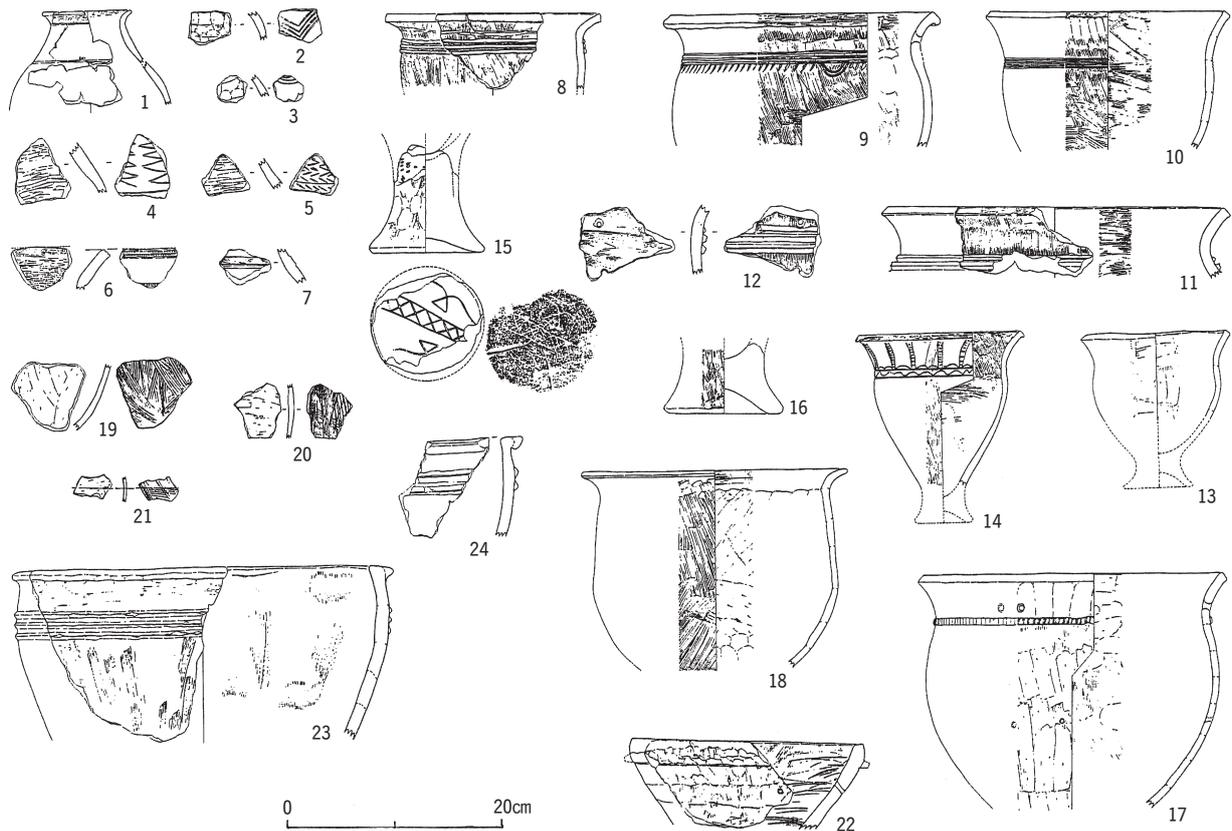
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県歴史資料センター黎明館に保管されている。

参考文献

広目遺跡学術調査研究会2003「種子島広田遺跡」鹿児島県歴史資料センター黎明館

(盛園尚孝)



第6図 出土土器(埋葬跡1～21), 生活跡(23～24), 22は埋葬跡出土の滑石製石鍋